

# 出島表門橋公園のデザイン

崎谷 浩一郎<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 (株) イー・エー・ユー (〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10本郷瀬川ビル1F,  
E-mail:saki@eau-a.co.jp)

長崎市に2017年11月に完成し、供用開始された出島表門橋公園について、設計期間(2013年12月から2年間)、施工期間(2015年から2年間)、供用期間(2017年から2年間)という3つのフェーズとそれぞれの特徴を記述する。出島表門橋公園は、国指定史跡の出島に新たに架橋された歩道橋(出島表門橋)に合わせて、出島対岸の水辺沿いを公園として整備したものである。本稿は、そのデザインプロセスと現在進行中の橋と公園の利活用について報告するものである。

## 国指定史跡、出島表門橋、出島表門橋公園、デザイン監理、橋と公園の利活用、コミュニケーション・デザイン

### 1. はじめに

2017年11月、長崎出島に約130年ぶりに再び橋＝出島表門橋が架かった。近代化の過程の中で一旦出島は長崎のまちに埋もれた。しかし、戦後サンフランシスコ講和条約の締結時、オランダが日本に対し、戦後賠償の破棄とともに出島の復元を要請したことを受け、長崎市は1951年から出島の整備計画に着手する。今回の架橋は2050年を目標とする出島復元事業の一環として実現した。橋はベルギーを本社とする構造設計事務所(株)ネイ&パートナーズジャパンが手がけ、筆者は出島と再び橋でつながった対岸の水辺のオープンスペース＝出島表門橋公園を設計した。また、設計チームの有志でDEJIMA AGAINというキャッチフレーズをつくり、工事の仮囲いへのグラフィック、現場見学会、映像制作、ワークショップ、様々なコミュニケーション・デザインを行った。その活動が地元企業や多くの長崎市民が事業へ大きな関心と関わりを持つきっかけとなり、供用後の現在も市民有志による橋と公園のメンテナンス活動(はしふき)へとつながり、インフラとユーザーの新たな関わり方が生成されつつある。

### 2. 経緯・検討体制

#### (1) 事業の経緯

本事業の設計者は2013年10月に長崎市(長崎市経済局文化観光部出島復元整備室(当時))より公示された、歩道橋と公園の設計プロポーザルで選定された。プロポ

ザルの特徴として、橋梁、公園、文化財、景観、それぞれについて担当技術者をつけることが求められていたことが挙げられる。また、設計期間が予め複数年契約(2013年末～2015年11月)で提示されていたこと、提案者は「長崎市内に本店または支店があること」が明示されていたこと、も特徴であった。プロポーザルの結果、筆者を含む設計チームが、九州オリエント測量設計(株)(2017年10月より(株)オリエントアイエヌジーに改名)を筆頭にした体制(表-1)にて特定され、2013年12月～2015年11月の約2年間の設計期間と2015年12月～2017年11月の約2年間の施工期間を経て、2017年11月に供用開始されたものである。

表-1 設計体制について

①会社名	②担当者 (⑥責任者)	③担当する 業務分野	④担当内容	⑤元請補佐
九州オリエント測量設計(株)	◎杉本 秀弘 平野 明 川村 昭宣	業務全体の統括管理 契約・照査	業務全体の統括管理・受注元請手続関係・元請責任者後業務・最終調整窓口・資料収集	
(株)オリエントコンサルタンツ九州支店	◎寺田 秀弘	契約補佐	契約関係手続の補佐	
(株)ネイ&パートナーズジャパン	◎渡邊 竜一 Laurent Ney	表門橋基本設計 実施設計	橋梁デザイン 予備設計・詳細設計・構造部材(一次ユーゴット)図面作成、島嶼区作成 施工計画・工事費算出	川村 昭宣 (技術士)
(株)オリエントコンサルタンツ構造部	◎上野 淳人 馬越 正純	表門橋基本設計 実施設計	条件設定 予備設計の検証・詳細設計、日本基準での検証(示方書) 施工計画・仕様書作成・工事費算出	下田 展弘 (ROOM)
(株)イー・エー・ユー	◎崎谷 浩一郎 山田裕貴	中島川公園基本設計 実施設計	デザイン基本計画 公園設計、島嶼区作成・橋梁製作 公園詳細設計・工事費算出	松尾 寿徳 (技術士)
(株)オリエントコンサルタンツ都市デザイン部	◎太田 啓介 岡田 裕司	全体マボシメント資料とりまとめ	連絡調整窓口・業務全体マボシメント・デザイン調整資料取りまとめ	奥山 健二 (一級建築士)
(株)文化財保存計画協会	◎柳沢 礼子 矢野 和之	文化財に関する検討 歴史考証	文化財に關する検討 歴史考証 文化庁協議	陣内 勝久 (測量士) 山口 明利 (学芸員)

#### (2) 設計体制

設計体制で特筆すべきは、橋梁担当にベルギーに本社

を置く構造デザイン事務所(株)ネイ&パートナーズジャパンが参加していたことである。筆者は、代表の渡邊竜一氏と以前から面識はあったがプロジェクトで共同するのは出島が初めてであった。Ney & Partners は1996年にLaurent Ney氏を中心に設立され本社ブリュッセルの他に、ナミュール、アントワープ、ルクセンブルク、ハノイそして東京にパートナー会社を持っている。(株)ネイ&パートナーズジャパンは2012年設立の東京のパートナー会社で、渡邊氏はLaurent氏とともにその代表を務めている。筆者は公園担当として渡邊氏と連携し、歩道橋と公園のデザインについて密に連携を図りつつ、設計だけに留まらず事業のプロモーション活動を展開した。文化財担当は、筆者もかねてより複数のプロジェクトを共同してきた(株)文化財保存計画協会、また、プロポーザル参加条件であった長崎市内に本店を持つ会社として、九州オリエント測量設計(株)((株)オリエントアイエヌジーに改名)とチームを組むことになったが、お互いまったく面識のない会社であった。これらチームを景観担当の(株)オリエンタルコンサルタンツ(太田啓介氏)が全体を統括する立場で設計を進めた。なお、設計の発注部署はそれぞれ、歩道橋については長崎市建設局道路建設課、公園については長崎市建設局都市計画部みどりの課による発注である。

### (3) 会議体制と主な議論内容

設計期間中における会議体制は、長崎市出島復元整備室が事務局を務める「出島表門橋及び周辺整備デザイン検討会議(以下、デザイン会議)」(2回目以降公開、全7回開催)を最上位の会議体として、その下に「庁内ワーキンググループ(以下、庁内WG)」(非公開、全7回開催)、各部署との個別協議(非公開、全38回開催)と大きく全3種類の会議体で構成された。また、関係機関との協議として長崎県との河川協議(7回)、文化庁協議(3回)、港湾協議、警察協議もそれぞれ実施した。デザイン会議における主要な議題については庁内WGにて十分議論がなされ、事業主体としての長崎市と設計チームが一体となって上位のデザイン会議に提示された。これは、庁内WG総括者であった当時の長崎市建設局長のリーダーシップのもと、長崎市景観専門監の高尾忠志氏が行政と設計チームの間で奔走し、関連各部署の担当者がそれぞれの職責を果たした結果だと筆者は考えている。デザイン会議の成果のうち、特に空間計画上大きかったものとして挙げられるのが以下の3点である。

- ・ 橋詰付近における中島川右岸護岸の切り下げすること。
- ・ 右岸公園側の転落防止柵高さを900mm(通常1100mm)で計画すること。
- ・ 検出された遺構は露出展示すること。

## 3. 出島表門橋公園のデザイン

### (1) 設計経緯

計画から設計までの2年間、同じ設計チームで関わることができたことはデザインについて一貫性を保つ上で重要であった。基本計画において、現状把握、敷地分析、整備計画、動線計画、それらを踏まえた前提条件の整理、特に遺構の取り扱い方針について文化財関係部署と議論と方針を共有できたことは、設計にあたって欠かすことができない成果である。今回の橋梁および公園整備予定地は一部を除き発掘調査が行われておらず、往時の施設配置を類推するために確度の高い絵図(長崎惣町絵図)の提供を長崎市より受け、現況測量図との重ね合わせによって計画を立てる手法を採用した。また、特に江戸町側(右岸側)については、橋台および公園整備のため、長崎市によって発掘調査(2014年度)が実施され、橋台計画部に明治期の階段遺構が検出された。あわせて、往時の宅地基盤または護岸の一部と思われる石積みも検出され、一部公園内に露出展示している。

また、動線計画については、新たに生まれるまちの東西動線に対応すべく、プロポーザル段階から提案していた横断歩道の移設も計画として採用されている。

施設配置および公園デザインの方針としては、橋が中心の空間でありながら、あくまで「出島が主役」という考え方のもと、余計な要素を極力廃し、形態が主張することなく空間で展開される活動が主役となる場の創出を目指した。基本計画がまとまり施設の大まかな配置方針が長崎市と共有された段階で、設計チームにサイングラフィックデザインを担当するDIAGRAM(鈴木直之氏)、建築設計を担当するkuua.(瓜生浩二氏)、照明デザインを担当するSIRIUS LIGHTING OFFICE(戸恒浩人氏)の3社にも加わってもらった上で、基本設計および実施設計のとりまとめを行なった。なお、関連事業として長崎県護岸整備(右岸側延長約120m、高さ約3mの石積み護岸改修、2015年度~2016年度)、長崎市出島復元整備室による出島内六棟復元事業(2011年度~2016年度)が進められており、特に長崎県護岸整備と橋梁および公園の取り扱いについては、現場施工段階での協議、調整が必要な状況であった。

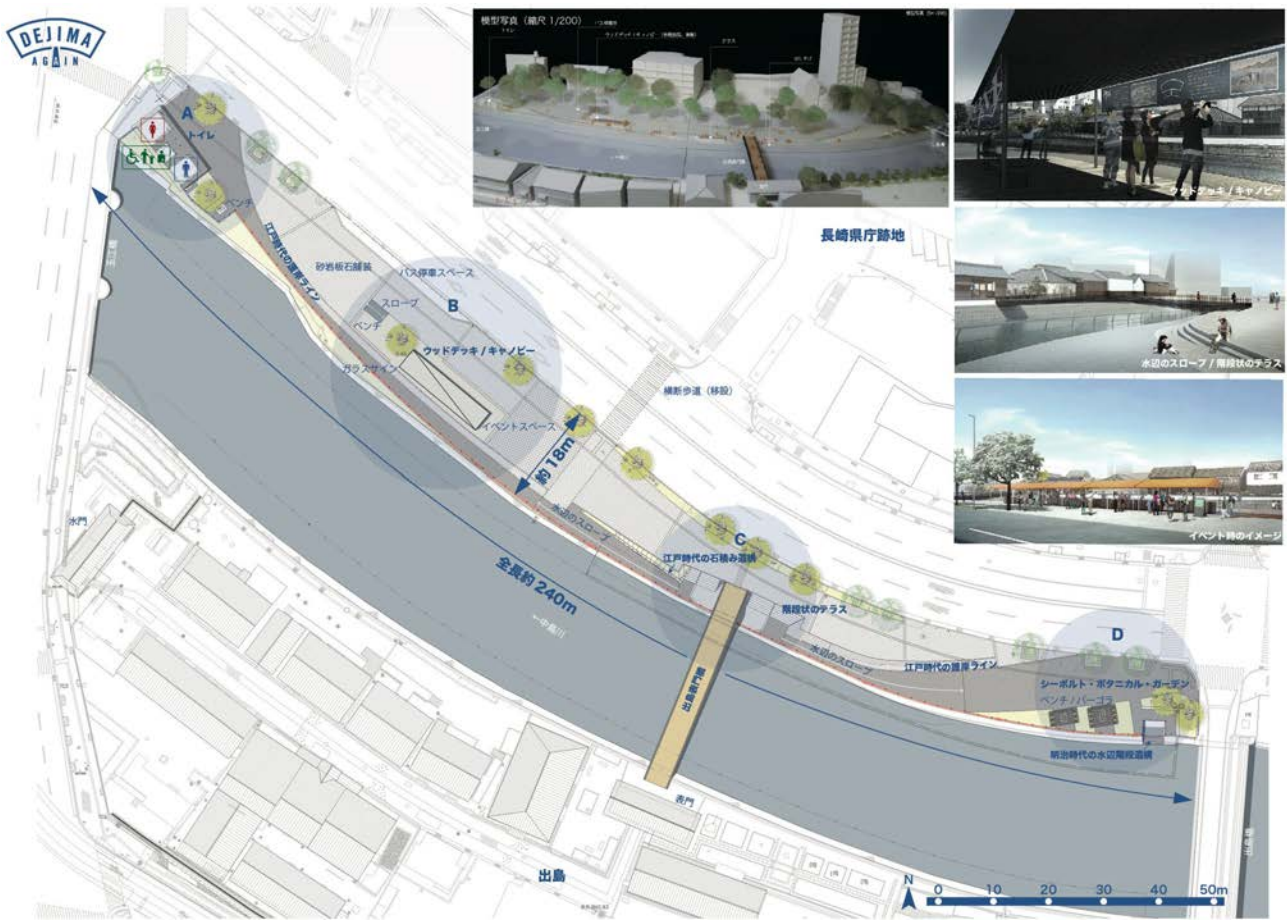


図-1. 計画平面図

## (2) 公園のデザイン

公園のデザインは「時間の連続性」を意識して、かつて橋が架かっていた江戸時代の水際護岸線を新しい公園の骨格に取り入れ、長崎の人々の無意識に沈みかけていた出島という存在を風景のまとまりとして顕在化させることをデザインの意図としている。

全長約 240m、東西に細長い公園は江戸時代の護岸ラインが全体の形をつくっている(図-1)。公園の西側、玉江橋脇(A)にはバリアフリー対応のトイレを配置し、出島を眺める場所(B)は公園の中でも一段高いウッドデッキとした。夏の暑い日差しや雨をしのぐキャノピーがあり、ガラスサインで昔の出島の形を知ることができる。公園の中心的な場所なのでイベントスペースとしても最適である。出島表門橋のたもと(C)は公園内で高さ約 1m 切り下げられた階段状のテラスになっている。階段に座って佇んだり、出島築造当時の橋詰め形状を知り、発掘調査で検出された江戸時代の石積み遺構を見ることが出来る。公園の東側、出島橋脇(D)にはシーボルトの里帰り樹木のシーボルト・ボタニカル・ガーデンを計画した。ここでは、護岸改修時に検出された明治時代の階段遺構を見ることが出来る。

## (3) 造成計画

公園の計画高さについては従前の地盤高を踏襲し周囲との連続的な動線を確保している。特徴的な点は、江戸時代の護岸線(旧護岸ライン)を境に橋梁橋詰へ向かって、公園の標準計画高より約 1.0m 低く切り下げている点で、この結果、橋の構造体は公園の標準計画高の下に位置している。これにより、橋梁としてはユニークな構造形式である橋全体を見ることができ、公園としては旧護岸ラインの顕在化、水辺に向かうスロープ、滞留スペースの確保、橋梁周辺における出島への眺望といった利点が生まれる。当然、河川管理者としては少しでも護岸の高さは低くしたくない、という状況ではあったが河川協議の結果、H.W.L+余裕高が確保できていれば問題ないということで既設護岸の切り下げが実現している。また、公園全体の排水勾配(概ね 1.5%)は旧護岸ラインをトップにして両側に取りすることでコストやメンテナンスがかかる排水施設を使わない工夫を行なっている。

## (4) 舗装・植栽計画

舗装は大きく 2 種類で構成されている。江戸時代に陸地だった部分は長崎市内で一般的に使われている自然石の砂岩舗装(300mm×600mm)を、また、海だった部分は

自然石コンクリートブロック舗装とした。自然石については、設計段階では磁場材の「諫早砂岩」としていたが、実際の施工については生産が寡占状態になっているという理由で公園内のほとんどが「中国砂岩」となっている。また、キャノピーの東側は地元の要望もあり、くち踊りの練習場として一部御影石舗装とした。自然石コンクリート舗装については骨材を調整して温かみのある茶系のものを採用した。細長いプロポーションによって橋を中心とした空間の方向性を持たせるとともに、そのモジュールがトイレ躯体の杉板型枠のピッチと対応するような寸法を選定した。旧護岸ラインについてはグレーの安山岩で平板と小端立てを併用している。全体的におおらかな印象でありながら、長崎に多く見られる石積みやレンガといった素材に見られる細部から全体を構成するという要素を随所に取り入れた。河川の石積み護岸との取り合い部の公園縁石はその仕上げの風合いを現地で詳細に検討し、縁石の上面をビシャン仕上げ、側面を割肌仕上げとしている。また、護岸肩より 50mm 陸地側へセットバックした位置に配置することで、護岸と緩やかに縁を保ちつつ、全体の調和を図る工夫を行なっている。

高木植栽は歩車道境界部に既存のクスノキをなるべく残しながら、市の花であり潮風にも強く花をつけるナンキンハゼ、ヒトツバタゴを混ぜている。これは従前の鬱蒼とした印象だった公園を明るく開けた空間にするためである。ウッドデッキのシンボルツリーはケヤキとした。グラウンドカバーは使われ方を加味して、ビッタータス、イソギク、ノシバを使用した。公園東側に計画した5種類(ケヤキ、イロハモミジ、ナツヅタ、フジ、アケビ)の樹木はシーボルトの里帰り樹木として出島内にあったもので今回の公園整備に合わせて移植することとなり、新たにシーボルト・ボタニカル・ガーデンとして配置をしている。

#### (5) トイレ、キャノピー、パーゴラ

公園東側端部に配置されたトイレは kuua. による設計で、RC 打放しで屋根が金属製である。出島が建物の復元を進める一方で、公園内の建築物はそれら歴史的なものに意匠を寄せるのではなく、あくまで機能的に出島と対比したデザインとしている。キャノピーは(株)ネイ&パートナーズジャパンの設計で、4m×18m の薄いボックス状のモノコック構造の屋根を4本の柱で支えるデザインで、屋根勾配と光の当たり方で遠目からは存在を感じないで近くに寄れば存在を感じる。橋に通じるデザイン思想によってつくられている。パーゴラは、シーボルト・ボタニカル・ガーデンのフジとアケビによって緑陰をつくるものである。独立した柱がそれぞれ2本のワイヤーを支え、移植したフジやアケビが育つまでの緑陰づ

くりと蔦が張っていくための下地として黒竹でフレーム下地を組んでいる。

#### 6) ファニチュアデザイン

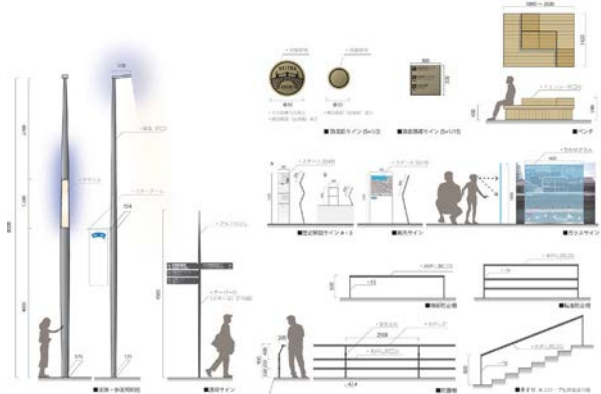


図2. ファニチュアデザイン一覧

#### a) 転落防止柵・手すり

公園施設の中で最もデザインに気を遣ったのが、水辺の転落防止柵である。中島川沿いは昔ながらの石造りの転落防止柵が多く、それらは高さが 850mm 前後でいわゆる防護柵設置基準の 1100mm に満たない。また、東京の隅田川テラスのように自転車の侵入がない水辺については、利用者の重心の高さが自転車に比べて低いため、高さを 900mm に設定している事例もある。柵のよじ登り対策については柵を内側に傾けることで効果が高いこともこれまでの実績で経験していた。これらの状況をデザイン会議で報告し、実際に高さ 900mm の実寸模型を製作して高さや傾きについて共有した上で、高さ 900mm を前提にデザインできたことが何より大きかった。支柱はメンテナンスを考慮して部材をなるべく一体的に成形するために鋳鉄製とした。特に柵が風景に消えるような印象を与えなかったため、トップレールに向かって支柱断面を細く切り替えるデザインとした。トップレールの断面形状は人が寄りかかりやすく、かつ内部に照明設備を配線するスペースを確保する必要があったため、金型で押し出し成形する熱押し型鋼とした。また、トップレールの断面は緩やかな波状の断面にして直接金属に手が触れる面積を減らすとともに、近くで見るとときに水辺に呼応する表情を狙っている。トップレールに合わせて横桟レールも熱押し型鋼の無垢材とすることでメンテナンス性に優れ、かつ型成形のため細かい面取り寸法についても図化し、製作時に調整することが可能であった。転落防止柵の横桟レールに使用したものと同一材料を公園階段部、スロープ部の手すりにも使用して部材の統一を図っている。

#### b) サイン(折り曲げサイン/ガラスサイン/矢羽サイン)・ベンチ

折り曲げサインは、無垢の鉄板(t=12mm)を折り曲げたような形状で全体の中では目立たないながらも、一定の存在感を持ちつつ機能を果たす寸法や角度を全て実寸模型で確認しながら設定している。現在の出島の中島川の左岸部は築造当初の形から大きく削られているが、削られる前の出島の形を知るためにウッドデッキ部にガラスサインを設置している。これはガラス記されたラインに目線を合わせることによって昔の出島の形を類推することができる仕掛けとなっている。矢羽サインは主に公園の出入り口付近に設置され、周辺施設への誘導機能を持つもので、地際と空へ向かって溶け込む印象なるように、柱が上下にテーパ形状となっている。ベンチは公園の東西出入口部にまとまったボリュームの滞留型の木製ベンチを配置している。使用した材は密度が高く屋外での使用実績が多い、ドゥッシー材である。

#### c) 照明（トップレール照明/ハイポール照明/白塀ライトアップ/デッキ照明/ベンチ照明）

照明は、出島への眺望を阻害する要素を減らすため、水辺のタスクライトは柵のトップレールにLEDテープライトを内蔵し、水辺を連続的に照らすことで防犯上安全な照度を確保（平均照度3lx以上）しながら、昼と夜の印象的な風景を生み出すことを狙った。また、ベースライトは歩車道境界部に設置後に出力の調整をできるように調光可能タイプのハイポール照明を設置し、歩道側に柱と一体となった発光部を設けて屋間は目立たず、予感に出島側から存在を感じるようなデザインとした（ポール照明は発注直前となり予算ありきでデザイン変更を余儀なくされている）。白塀のライトアップについては公園側から出島建物や白塀、護岸全体を照らしていた既存の投光器を撤去する代わりに、護岸肩部に極狭角タイプLED照明を埋め込み、塀の白いラインのみ浮かび上がるような照明デザインを行なっている。デッキ照明についてはキャノピーに照明をつけるのではなく、ウッドデッキに照明をライン状に埋め込むことを提案した（施工段階では想定した製品と異なるものが入ることとなり設置位置を再検討した）。また、ベンチにもLEDテープライトを内蔵し公園の出入り口にあかり溜まりをつくっている。

## 4. 施工について

### (1) 施工におけるデザイン監理について

本事業では、設計業務に引き続き、施工段階の現場のデザイン監理についても業務として受託し、継続的に設計チームとして関わることができた。これは主に出島表門橋の特殊性、史跡出島に関する特別な現場であること

が加味されたためである。比較的規模が小さな現場でありながら、橋梁、建築、県の河川護岸との調整、工区や職種間の調整が必要で、発注者である長崎市、施工者と連携して大テーブル方式（全体会議、個別協議）で進めた。設計チームとして毎回の現場定例（2016. 1. 29-2017. 11. 14 の間に 15 回）への同席、デザイン監理シート（橋と公園合わせて No. 1~No. 96）の作成、承認図、施工計画書を施工 2 週間前までに提出してチェックバックする体制をつくり、毎回各工事請負業者より工程表と進捗の報告、共有を行なった。広場や公園といったオープンスペースの現場は見た目以上に発注が細切れになる傾向が多いため全体で見て調整する人が必要である。また、サインの設置位置は図面で座標指示しつつも実際の現場で細かい位置や向きについて確認して施工する必要がある。

### (2) 資材の公共調達

公共調達における材料承認については、その権限が発注者にあるが、実際は現場の状況や事情によって設計段階の仕様に変更されることも少なくない。例えば、今回のウッドデッキの根太材は、設計段階では表層材と同じ国産の栗材（表門橋のデッキ材と同じ）を提案していたが、実際の現場には（コスト増にも関わらず）施工者の提案によってFRP材へ変更したものが納品されている。また、表層材の断面アスペクト比もたわみ増方向へ寸法が変更された。防腐処理についても設計での仕様が施されたことは確認できていない。自然素材のため、今後の挙動が心配である。このように、デザイン監理の立場がありながらも最終的には管理者の判断による変更が生じることについては止むを得ないと思うが、その変更が真の意味でのVE提案となっているかどうかは対象によって十分な吟味が必要であり、その点において改めてデザイン監理の有効性は大きいと思われる。今回の現場では一部舗装ブロックの施工やり直しを行なっているが、これは発注時期がずれたために工場で使用する使用骨材の規格や配合が同じでも、そもそもの石の産地が異なることによって明らかに色が異なるものが納入されてしまったためである。製品化されていても最終的なものにつくられ現場に入る過程には人間が介在する。デザインをする立場としてはものづくりの最後まで関わるのがその責務だと考えている。

## 5. コミュニケーション・デザイン

### (1) シンポジウム

本事業はプロポーザルの時点から「市民シンポジウ

ム」の開催が予定されていた（プロポ要綱時点では2回）。これは、事業内容の周知はもちろん、まさに「市民」と一体となって出島の復元や架橋、公園整備を進めていく必要性から実施されるべきもので、設計チームも企画の議論に入りながら、最終的に5回の連続シンポジウム（表-2）という形で開催された。シンポジウムを通じて、様々な形で市民の前に関係者やデザイナーが顔を出していくことによって、ある一定の市民の方々にはプロジェクトへの興味や親近感を持つことにつながったと思われる。シンポジウムで使用したパネルや模型、来場者のメッセージボードについては出島の内外倶楽部 2F に DEJIMA DESIGN CENTER と題し、期間限定で展示が行われた。さらに、地元住民を対象とした意見交換会にも度々設計チームとして参加し、住民の方々と意見交換を行なっている。

表-2 連続シンポジウム

第1回シンポジウム (2014/3/29)	①基調講演「文化財保護と出島復元」 ②パネルディスカッション「出島の世界的価値と長崎のまちづくり」
第2回シンポジウム (2014/8/2)	①基調講演「長崎の都市の魅力とデザイン」 ②ダイアログ「出島表門橋・中島川公園の整備に向けての想い」 ③想い共有ワークショップ「Message 展—出島と私—」
第3回シンポジウム (2015/3/21)	①基調講演「見えてきた出島のオランダ、そしてオランダの出島」 ②パネルディスカッション「海外から見た出島」
第4回シンポジウム (2015/7/11)	①基調講演「地域戦略としての橋とデザイン-欧州での取組みを通じて-」 ②カウンタダウン WS: 2017年の完成に向けて自分たちができることは何か
第5回シンポジウム (2015/11/28)	①基調講演「長崎の都市形成と出島」 ②カウンタダウン WS: 中島川公園の活用を考えよう

## (2) コミュニケーション・デザイン

シンポジウムもコミュニケーションのひとつである。テーマを決めて基調講演とパネルディスカッションを行う、という一般的な形式もあるが、形式に捕らわれたところからは真の意味でのコミュニケーションや価値は生まれない。ここを未来に向かってクリエイションしていくところにデザインの価値と意味がある。シンポジウムの企画や議論、市民の方々とコミュニケーションを通じて、筆者らは「DEJIMA AGAIN」というキャッチフレーズとグラフィックを第4回シンポジウム（2015/7/11）にてリリースし、市民の方々とより本質的なコミュニケーション戦略を展開した。具体的には2016年より工事の仮囲いをインターフェイスにした仮囲いプロジェクトを皮切りに、PR事業として「出島表門橋架橋イメージアップ事業」を展開した。活動を通じて地元企業とのつながりも生まれ、2017年2月の架橋イベントは多くの市民が見守った。また、架橋後に始めた「DEJIMACTION!」は実際に市民の方々の参加や協働を促す企画によって、出島や橋、公園の様々な空間利用を実験的に実践する試みであり、公園内に配置した「ミッフィー・オリエンテーリング」（公園内の様々な素材の中に隠れたミッフィーを探す仕掛け）が実現したのは、

当時の現場に新しい試みをやってみようという空気感が生まれていたことが伏線となっている。こうした活動の母体は本事業の元請であった、九州オリエン測量設計（株）（（株）オリエンアイエヌジーに改名）の担当者が代表を務める実行委員会形式で進められた。通称「DEJIMA BASE」と命名された組織は、2017年11月に橋と公園が供用開始から2019年現在でも任意団体として活動を続けている。特に「はしふき」と呼ばれる活動は、毎月第2第4月曜日の夕方に市民有志が集まって、橋を拭き公園やトイレの清掃活動は2019年9月現在、開催回数が40回を超え、インフラと個人との新たな関係性が生まれつつある。2019年度は長崎市による市民活動助成を受け、より積極的な公園利活用の活動を進めている。

## 6. おわりに

本稿では、出島表門橋公園のデザインについて、実現に至った経緯および体制、設計およびデザインについて、施工におけるデザイン監理、コミュニケーション・デザインについて報告した。公共のデザイン、設計においてコラボレーションというスタイルが一般的になり、ワークショップやシンポジウム、社会実験など市民、エンドユーザーと一体となった事業プロセスの形式も充実している。しかし、ピアニストのグレン・グールドの言葉に『人間が最も感動し共感する芸術はよく練られた逸脱の様式だ』という言葉があるように、それらの本質的な部分への到達や共感、行動へとつながるためには、その形式に捕らわれない実験的試みを繰り返し、積み重ねることが重要である。デザインを取り巻く状況が時代とともに変化し続ける時代だからこそ、コミュニケーションのあり方によって、インフラとユーザーの間に新しい関係性や価値の生成を誘発することもデザイナーの役割ではないだろうか。



図-3. 出島表門橋公園（写真：小島健一）